

① 雲巖寺

名称 東山雲巖寺とうざんうんがんじ

宗派 臨濟宗妙心寺派

所在地 黒羽町大字雲岩寺二七

沿革 雲巖寺の旧記によれば、当寺は崇徳天皇の大治年間（一一二六―一一三〇）に、山城の禅林寺永観律師の高弟叟元和尚の開基である。和尚は三論（中論、十二論、百論）に精通し、五十余歳のころ関東に行脚し、常陸の筑波山に草庵を結んで籠ること久しかった。その後下野に来て当山を開いた。その徳を慕って四方から集る雲水は三百名の多きに達したという。老後は諸宗の教学を棄て、もっぱら読経礼拝に日を送り、保延元年（一一三五）六月、七十一歳で示寂した。里人は安然仏と称した。

その後法燈を継ぐ者がなく中絶して、諸宗の僧侶が雑居した。山伏勝頼という者が長く住んでいたが、後嵯峨天皇の第三皇子仏国国師が行脚して当山に来たので、勝頼は国師に弟子の礼をとり、当山を国師に献じたという。弘安六年（一二八三）に執権北条時宗が大施主となって、仏国国師が禅林として再建した。ここの地形が中国

の蘇州虎丘山に似て千丈岩があるため、雲巖寺と号した。これより塔堂も整い法燈が輝き、国師の名声を慕って来山する僧徒一千を数えたという。

仏国国師は仁治二年（一二四一）に生れ、十六歳で出家し、内外の典籍を学び、苦行修練を積んだ。当山を開いてからも鎌倉幕府の命により、鎌倉の諸名利に於て法を説いた。晚年東山の正宗庵に戻り、正和五年（一二三六）十月二十日、七十六歳で示寂した。遺偈は、

「坐脱立亡、平地骨堆、虚空翻筋斗、刹海動風雷」

二世仏応禪師は、建治二年（一二七六）、黒羽町大字大豆田の磯家に生れた。五歳の時に父が死去したので、以後雲巖寺に預けられ育った。出家して仏国国師について修行、また諸国を行脚して修養を重ね、後に国師の後を継いだのである。嘉暦二年（一三二七）九月二十四日、五十二歳で遷化した。遺偈に「末後一句、向下文長、処処無蹤跡、地獄与天堂」

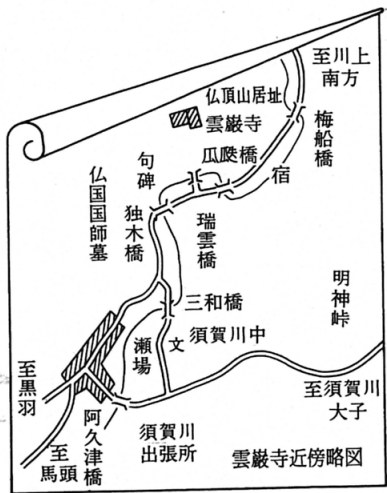
その後当山は戦乱の世にあい寺運は衰えていったが、天正六年（一五七八）妙心寺派の勅諭無住妙徳禪師を住職として招いた。これにより当寺は京都妙心寺派となった。

天正十八年（一五九〇）、秀吉の小田原城攻略に従わなかった烏山城主那須資晴は、城を没収されて佐良土に移された。その時に資晴は雲巖寺に拠ったと告げた者があったので、秀吉はこれを信じ、兵を遣わし火を放ち、寺院を焼失させ、その上寺領をも没収した。これにより寺運大いに衰えたが、時の住持無住妙徳禪師はその後熱心

に寺門の復興に努力したが昔日の盛観を見ることはできなかった。
禅師は中興開山と称せられる。

徳川時代に至って、將軍家光は百五十石の寺領を給し、寺は代々これを相続した。弘化四年（一八四七）不幸にも再び火災に罹り、方丈、庫裡を焼失したが、嘉永二年（一八四九）再建された。天正の兵火後仮建築であった釈迦堂は、腐朽ひどかったので大正十一年（二九一五）に改築（鎌倉時代末期の様式にならない）された。昭和二十六年、山門前の瓜麩橋かぶつが架け替えられ、同五十五年には坐禅堂が新築された。

建造物 本堂、方丈、庫裡、山門、鐘楼、釈迦堂、三仏堂、坐禅堂、その他



雲巖寺近傍略図